

先日、名古屋の栄にある、ビルの地下駐車場の排気ファンのベアリング交換に行きました。排気ファンは地下の機械室にあるわけですが、たいていこの「地下の機械室」というのがビルの外観の華やかさとは別世界の、古い映画に出てくるフランケンシュタインの実験室とか、ドラキュラの古い棺があるような古びた物置、といった風の独特の雰囲気があり、そこでシャフト径100もある巨大なファンのベアリングをどうやって交換しようかと、必死になって水畑さんと考えながら作業していました。2人ともものすごい集中力で「ファンのベアリング交換をいかに効率よく、安全に高品質で完了させるか」だけを考えて作業していましたので、無事に午後3時くらいで作業を完了させることができました。

機械室の中はほこりだらけで、クツも汚れていてトイレや廊下も足跡がついていましたので、水畑さんが床にひざをつけながら最後まできっちりウエスで拭き取り「立つ鳥跡を濁さず」で地上に上がってきました。

すると水畑さんが第一声「なんかすごいキラキラしていますねえ」と言いました。自分もはっ、として周りを見渡すと、確かにキラキラしていたのです。土曜の栄の町をみんなが楽しそうにショッピングをしていて「おー、この消費社会生き生きしているいいねえ〜」とか、空が青く太陽が輝いていて「う〜ん、都会はコンクリートジャングルとか昔から言っていたけどムチャクチャ自然があるじゃん。きもちいい風〜！」とか、ミニストップにイチゴソフトの看板を見つけて「あんなもん、女子供の食べるものだと思っただけで1回トライしてみようかなあ」とか、ノリタケチャイナの看板を見ては「これを引き出物にした結婚式もいいなあー」とか、本間ゴルフのモグラのマークが笑っているように見えたりとか...目にするものが全て人生を楽しませてくれているような感じがして、幸せ感を味わいました。そして次に思ったことは、今中国の人たちは多分こんな感じで世界がみえているんだらうなあ、ということでした。

自分と水畑さんとバイトさんが、ひたすらファンのベアリング交換のことだけを考えていた無彩色の地下から、まぶしい光のさす、たくさんの人達でにぎわう栄の街中に上がってきた状況と、長い共産主義の時代から突然自由主義の消費社会に移行してきた状況は、なにか似ているのではないかと感じました。とすればあの中国人の熱気やバイタリティーは、長い共産主義の時代があったからこそであり、我々がキラキラと輝く栄の町並みをみて幸せ感を味わったのも、地下での悲惨な仕事があったからこそ、という法則が成り立つのではないのでしょうか。

「幸せになるには負の要素を背負わなければならない」ということを言った人がいますが、確かにそうかもしれないと思いました。日本に住む我々は、世界中の人から見ると本当に何でも与えられているにもかかわらず、いつもどこか不満で退屈で、人の批判ばかりしていて、ワイドショーも週刊誌もそんな記事であふれていて、今の現状がどれだけ恵まれていて、それに対して本当に感謝するという行為が忘れられているのではないかと感じます。「でも何にどうやって感謝するの?」という思いが自分の中にもあって、だからこそあの地下から地上に上がった時の幸せ感、昭和30~40年代のイキイキ感、今の中国の人のようなバイタリティーを取り戻すために、あえて負の要素を取り入れるべきではないかと思うのです。

ある若者がバイクの修理会社へ就職したとする。何十人もの新卒を採用した経営者は強気で、「やる気のあるやつだけ残れ。やる気のないやつはやめてもらって結構」と言わんばかりの人間性無視のパーツ扱いに、1ヶ月で嫌気がさし、ヘトヘトに疲れた体で家に帰って、ビールを飲んで不満タラタラ。田舎の友達に電話したらけっこう楽しそうで、いい給料ももらっている。お前も帰って来いよと言われる。ここからが正負の分かれ目。正・正・正の楽しい話に乗った先に本当に幸せ感が得られるのか。負・負・負だけでも社会にもまれ、仲間の嫌がる仕事でも進んでやっていく先に得た、実力で接した世の中にキラキラしたの見えるのか。私であれば「若者よ迷わず負をとれ!!」と言いたい。

水畑さんが私が気付かなかった町のキラキラに気付いたのは、作業が終了した後の最後の最後のトイレの床ふきまで、あの巨体を丸め、両手両ひざをつけてきっちり仕上げたからこそだと思います。

「正負の法則」を教えてくれた水畑さんが今月の私の師です。